

カール・エーミール・フランツォースとウクライナ

伊 狩 裕

1 .

1920年12月13日付「新ベルリン新聞」は、ベルリンにおける当時のウクライナ・ブームを伝えている。このブームに先立って、ベルリンではポーランド、ギリシャ、ロシアが流行したのであったが、ポーランドは西欧化しすぎたため、すでに飽きられ、ギリシャについても正確な知識がゆきわたり人々の関心は薄れ、ロシアは、帰還したロシア・ドイツ人や戦争捕虜を通じて身近なものとなり、「もはや寄席やオペレッタでは使い物にならず」、その結果、「残ったのがウクライナ」であったという。すなわちウクライナは、その漠としたイメージによってベルリンの人々の好奇心と異国情緒をおおいに刺激したのであった。当時のベルリン市民にとって、ウクライナは「コーカサスとカルパチアの間どこかにある国」であり、ウクライナ人は「人肉を食べるのか、文字を読めるのか」ということすらはっきりと断言できない民族であった。目移りの激しい都会人たちを相手にしてきたベルリンの商人も興業主も、「民族的・政治的概念」の商業的価値は知悉しており、無知につけ込む商法がはびこった。ユダヤ人の煙草屋は、看板に二つ三つキリル文字をあしらってウクライナ・オリジナルを売り物にし、カフェの踊り子たちは、ウクライナの民族舞踊と称して最新のアメリカのジャズにあわせて踊っていた。「ウクライナの」と称すれば客は集まった。「ウクライナの」パントマイム、バレエ、オペレッタは特に人気があったが、実態はロシア風、ポーランド風、タートル風のミックスであった。どこかしらスラヴ風の響きのあるメロディーは、どれも「ウクライナ風」とされた。

『ウクライナ狂い ベルリンの最新モード』と題して、浅薄なブームを

皮肉をこめて描写し、「国家としての独立を喪失したとたんに一民族がオベレッタや寄席を風靡し始める現象それ自体が興味深い」¹⁾と結ばれるこの記事を書いたのはヨーゼフ・ロートであった。ウクライナが「国家としての独立」を維持できたのは、第一次世界大戦末期、1917年の革命に始まるロシアの混乱のなかで、キエフの中央ラーダ（評議会）が「ウクライナ人民共和国」の独立を宣言してからポリシェヴィキによって放逐されるまでのわずか2年あまりに過ぎず、その間、1918年10月にはリヴィウ（レンベルク）の民族ラーダも「西ウクライナ人民共和国」の独立を宣言するが、ポーランド軍の攻撃の前にわずか3週間でリヴィウを逐われ、ウクライナ民族史上初めて「ウクライナ」の名を冠して樹立された両人民共和国は、統一はおろか、国家としての体裁を整える暇さえなかった。ウクライナ史家スプテルニーは、その間の混乱をつぎのように述べている。

1919年にはウクライナは完全なカオスに飲み込まれた。実際、ウクライナがこのとき体験したような完全な無政府状態、激しい内戦、権力の完全な失墜を経験した国家は、ヨーロッパの近代史においてはひとつもない。6つの異なる軍隊、すなわちウクライナ軍、ポリシェヴィキ軍、白軍、協商軍、ポーランド軍そしてアナーキストたちがそれぞれのテリトリーにおいて作戦を展開した。キエフは一年弱のあいだに5回支配者が変わった。都市間、地域間は多数の前線によって互いに分断され、外界との連絡はほとんど完全に絶たれた。²⁾

すなわち、わずか2年あまりの「国家としての」ウクライナの実態は戦場であった。ヨーゼフ・ロートも1916年にオーストリア帝国軍に志願し、1918年11月4日にオーストリアが降伏するまで、第32歩兵師団の一兵卒としてウクライナの戦乱のなかにあった。ハプスブルク帝国崩壊後、ロートはガリツィアで何度かウクライナ軍に入れられそうになりながら、1919年にウィーンへ戻る。しかし敗戦後のウィーンでは職を得ることもできず、1920年6月にベルリンに移り、「新ベルリン新聞」に執筆の場を見出したのであった³⁾が、そこで目撃したのがベルリンの「ウクライナ狂い」であった。ウクライナが

「国家としての独立を喪失」する「完全なカオス」の現場を目の当たりにしてきたルートには、当のウクライナが、ベルリンで「オペレッタや寄席を風靡し始める現象それ自体」、たしかに「興味深く」もあり、また感慨も深かったことであろう。

ウクライナは、1920年に突然ドイツ人の関心の対象となったわけではなかった。1914年6月にオーストリアがセルビアに宣戦布告し、8月にドイツがオーストリア側に立ってロシアに宣戦したのを機に、両陣営の前線となったウクライナの地に対する関心は西側でも高まり、一般のドイツ人の耳にも「ウクライナ」という言葉が入ることが多くなった。たとえば、ルートも先の記事で触れているが、ウクライナ兵站地への配属には「割り増し手当」がつき比較的暮らしが楽であるといった日常的な話題のなかでも「ウクライナ」はひろく語られ、また、1918年初めにキエフを占拠したドイツ・オーストリア軍が、ウクライナ人民共和国に対して100万トンの穀物供給を約束させた条約は、「パンのためのウクライナ講和」(ukrainischer Brotfrieden)⁴⁾と呼ばれ巷間にも知られた。またドロシェンコによれば、「世界大戦の勃発以来ウクライナがドイツの一般大衆に引き起こした関心は文学のなかにも重要な反響を見出した。市場にはウクライナの生活を素材にした文学や、ウクライナ人を主人公にした文学もいくつか現れた」⁵⁾という。たとえば、ドロシェンコは、ザールブルクの『ウクライナの息子』⁶⁾という1916年の小説を挙げる。この小説は、ドイツ人大学教授の家庭を舞台に、夫婦、親子間の不協和と、その家庭に出入りする人々の交渉を描いた写実主義的心理小説であったが、作品の舞台となる家庭の庭師兼下男として登場するウクライナ人は、小説の筋書きから見れば脇役に過ぎず、その卑屈なまでに恭順な態度に、当時のドイツ人のウクライナ観を窺うさすがにこそなれ、タイトルに掲げられなくてはならないほどの役割を作中で与えられているわけではない。にもかかわらずこれを『ウクライナの息子』と銘打つのは、1920年のベルリンのユダヤ人煙草屋、カフェの踊り子と同工であるが、これを翻せば、1920年にヨーゼフ・ルートがベルリンで目撃した「ウクライナ狂い」は、遅くとも1916年まで遡ることができるということである。

しかし、第一次世界大戦以前のウクライナは、民族としても文化としても、

ドイツを含めた西ヨーロッパでは一般にはほとんど知られていなかった。19世紀のパリが、列強に祖国を奪われた亡命ポーランド人政治家・知識人・芸術家たちの、祖国回復を目指す活動の拠点となっていたことは、たとえば、政治家のチャルトルスキ、作曲家ショパン、作家ミツケヴィチらの名を通じてよく知られているが、同じ頃ウィーンは、パリがポーランド人に対して果たしたのと同じ役割を、ポーランドに祖国を奪われたウクライナ人たちに対して果たしていた。そこに定住するウクライナ人政治家・知識人たちがドイツ語圏へ向けてウクライナの自立を訴えるために発行していた雑誌「ルテニア展望」は、1903年の創刊の辞「読者諸氏へ」において、「ルテニア人ないし小ロシア人（いずれもウクライナ人を指す - 伊狩）は、周知の通り、その人口からいえば、・・・ヨーロッパで6番目であるにもかかわらず、ヨーロッパ諸民族の間で取り立てて重要な地位を占めていないばかりか、彼らの状況、それどころかその存在さえ、ヨーロッパの教養人、政治家にすらほとんど、あるいはまったく知られていない」⁷⁾と述べている。

しかし、西ヨーロッパでも、すでに1731年にヴォルテールが、スウェーデン王カール（シャルル）12世の事績を記した浩瀚な史書『シャルル12世の歴史』において、王がロシアとの北方戦争のさなか、1707年にロシア南部へと迂回するくだりで、ウクライナについて紹介していた。

シャルル12世は、モスクワへの道を放棄し、南のウクライナへ向かった。ウクライナはコザックの国で、小タタールとポーランドとモスクワの間に位置している。その国は、われわれの尺度で、南北およそ100里、東西もほぼ同じである。国土は、北西から南東へ横断して流れるボリステネ川によってほぼ等分されている。都は、小さなセム河畔のバトゥーリンである。ウクライナのもっとも北の部分は農耕が行われ豊かである。北緯48度に位置するもっとも南の部分は、世界でもっとも肥沃で人口が少ない地方の一つである。その悪政は、自然が人間に与えようとしている賜物を妨げている。小タタールの隣人であるこの地域の住民は、種を蒔くこともなければ苗を植えることもしない。なぜなら、ブジャック、そしてプレコプのタタール人、モルダヴ

人たちはみな略奪者であり、ウクライナ人たちの作物を荒らしたからである。

ウクライナはいつも自由であることを熱望してきた。しかしウクライナは、モスクワ、スルタンの国、そしてポーランドに取り囲まれていたので、これらの3つの国の1つを庇護者、すなわち主人とする必要があった。ウクライナは、はじめポーランドの庇護下に身を置いたが、その臣下としての扱いは度を超えていた。ついでウクライナはモスクワに身を委ねたが、モスクワはウクライナを可能な限り奴隷として支配した。最初はウクライナ人たちも、将軍という名の自分たちの侯を選ぶ特権を享受していた。だがやがて、彼らはこの権利を奪われ、彼らの将軍も、モスクワの宮廷によって任命されるようになった。⁸⁾

このウクライナの地で、シャルル12世は、ウクライナの「将軍」すなわちヘトマン、マゼッパと出会う。

当時この地位に就いていたのは、ポドリア侯領に生まれたマゼッパというポーランドの紳士であった。彼はジャン・カシミールに仕えて小姓の教育を受けていたが、彼の宮廷で、いささか文芸にもかぶれていた。青春時代に、さるポーランド人貴族の妻との不義が発覚し、彼女の夫はマゼッパを全裸で悍馬に縛りつけさせ、これをそのまま放った。この馬はウクライナから連れてこられた馬であったので、疲労と飢餓のため半死半生となったマゼッパを乗せてその地へ戻っていった。数人の農民が彼を助け、その後長くマゼッパは彼らのもとで暮らし、タタール人との数々の戦いで令名を馳せた。彼はその知性において他を圧倒していたので、コザックたちの尊敬を集めた。彼の評判は、日に日に高くなっていったので、ロシア皇帝も彼をウクライナ侯とせざるをえなかった。⁹⁾

ヴォルテールの記述のなかでも、もっぱら後半のマゼッパ伝説のみが西ヨーロッパでは広まり、19世紀を通じてロマン主義者たちが愛好するモチーフ

となり、文学、絵画、音楽にくり返し取り上げられた。パイロンが、ヴォルテールの『シャルル12世の歴史』に基づいて叙事詩『マゼッパ』を発表したのは1818年であったが、その2年ほどのちに、パイロンの『マゼッパ』に触発され、フランスの画家ジェリコーが油彩『小姓マゼッパ』¹⁰⁾を描き、1827年には、同じくパイロンに触発されたプーランジェが、『マゼッパの刑罰』¹¹⁾をパリのサロン出品し、その絵に想を得たヴィクトル・ユゴーが1829年に、パイロンを引用しながら「マゼッパ」(『東方詩集』所収)を書き、プーランジェに捧げている。そのユゴーは、1840年にフランツ・リストからピアノ曲『マゼッパ』を献呈され、リストはこれをさらに1851年に、交響詩『マゼッパ』に拡大している。それと前後してドイツでは、1849年にアンドレアス・マイが5幕の劇『ステップの王』¹²⁾を、そして1865年にはゴットシャルが5幕の歴史悲劇『マゼッパ』¹³⁾を書いている。

第一次世界大戦前に「ヨーロッパの教養人」に多少なりとも知られていた「ウクライナ」は、このマゼッパくらいであった。とはいえ、マゼッパはもっぱら芸術的な表象としてだけ突出し、政治的・民族的なウクライナへと一般の関心を広げることにはならなかった。ヴォルテールから1世代遅れて、18世紀後半にヘルダーが、「ウクライナは新しいギリシャとなるであろう。この民族が戴く美しい空、彼らの陽気な性格、音楽の素質、豊饒な土地柄などはいつか目覚めるであろう。ギリシャ人たちもかつてそうであったのだが、無名で自然のままの多くの人々が文明化した民族となるであろう。彼らの国境は黒海にまで広がり、そこから世界中に広がるだろう」¹⁴⁾、と初めて民族としてのウクライナを称揚した一言も、歴大な彼の著述の片隅に埋もれ、ボーデンシュテットの『詩的ウクライナ』¹⁵⁾を除いては、ウクライナに対する一般の関心を喚起するにはいたらなかった。

2 .

一般にウクライナ人がドイツ語圏をはじめ西側で、「その存在さえ・・・ほとんど、あるいはまったく知られていな」かった数世紀の間にも、ドイツ人とウクライナ人の接触が保たれていた唯一の場所が、オーストリア帝国東

部の領邦ガリツィアであった。ドイツそしてオーストリアの大部分のドイツ人とは違い、ここに暮らすドイツ人にとっては、ウクライナ人は隣人であった。ガリツィアは、プロイセン、ロシア、オーストリアによる1772年のポーランド分割によってオーストリア帝国に編入された領邦であった¹⁶⁾。19世紀半ばのガリツィアの総人口は455万人余り、そのうちポーランド人が約186万人（約41%）、ウクライナ人約228万人（約50%）、ユダヤ人約31万人（約7%）ドイツ人約9万人（約2%）であった¹⁷⁾。分布としては、西部ではポーランド人、東部ではウクライナ人が優勢であり、都市部ではユダヤ人の割合が多くなった。ドイツ文化の国家ハプスブルク帝国の領邦とはいえ、ガリツィアでは社会的・経済的実権はポーランド貴族が握り、大部分が農奴として農業に従事していたウクライナ人、零細な商業、手工業（職人業）に従事していたユダヤ人を支配していた。ガリツィアのウクライナ人は、帝国内の異民族に対して比較的寛大であったオーストリア政府と、苛酷な隷属を強いるポーランド貴族の覇権争いの狭間で、その都度、命運を左右され、また一方、ロシア帝国下では、言語的・文化的近親性ゆえにロシア政府はウクライナ人を、「大ロシア」民族の下位・劣等・少数・辺境の変異（「小ロシア」）とみなし、これを「本物のロシア人」（true Russians）¹⁸⁾に仕立て上げるべく、同化政策がとられ、ウクライナ語、そしてウクライナの文化はきびしい制約と検閲の下におかれていた。いずれにせよ、19世紀当時、統一的な民族としての声を挙げるのが困難な環境にあったウクライナ人の文化に目を向けたドイツ人はわずかであり、一般には、ドイツ語圏ではウクライナは20世紀にいたるまで、前節で見たとおり、とりとめのないイメージのままにとどまったのである。

フランツォース（Franzos, Karl Emil 1848-1904）は、両帝国に分属させられていたウクライナ人の文化を高く評価した数少ないドイツ人の一人であり、彼は19世紀末当時、ウクライナ文化に通じた代表的なドイツ人とみなされていた。たとえば、ハプスブルク家皇太子ルードルフの発案になる、通称「皇太子の仕事」（Kronprinzwerk）で知られた『言葉と絵によるオーストリア・ハンガリー帝国』の「ガリツィア」の巻（1898年）は、「ルテニア人の民俗生活」の章で、ウクライナ民謡のドイツ語訳に関しては「カール・エー

ミール・フランツォースの雑誌」を参照するよう示唆している¹⁹⁾し、また、現代の『ウクライナ百科事典』においても、フランツォースは、19世紀後半のドイツ語圏におけるウクライナ文化の紹介者として、つぎのように記述されている。

1848年10月25日、ガリツィアの Cholotki 生まれ。1904年1月28日ベルリンにて死去。オーストリアの作家・文学者。1858年よりフランツォースはチェルニフツィに住む。ウィーン、グラーツの大学に学ぶ。1877年にウィーンに居を定め、「新絵入り新聞」、「ドイツの文学」の編集者となる。1886年ベルリンに移る。フランツォースは、ウクライナ農民を扱った詩、ショート・ストーリー、短編を著した。彼の小説『権利のための闘争』（1882年）は19世紀のフツールの苛酷な生活と社会の不正義に対する闘争を描いている。『ドンからドーナウへ』（1878年）に最終的にまとめられた『小ロシア人と彼らの歌人』（1877年）等の記事において、フランツォースはT. シェフチェンコを大変積極的に評価し、初めてこの詩人の才能に対して世界的な名声を要求した。『小ロシア人の文学』（『ドンからドーナウへ』第2版、1889年）においてフランツォースは、ウクライナ人をロシア人からはっきりと区別しつつ、11世紀から1880年代にいたるウクライナ文学についての一般的な記述を行った。²⁰⁾

ちなみに、同じく現代の『ユダヤ百科事典』は、フランツォースについてつぎのように記している。

オーストリアの作家・ジャーナリスト。内科医の息子として、Cholotki に生まれる。この町は、ロシアとガリツィアの境界線上のハシディックの生活の中心地であり、のちにバルノフという架空の名で作中に取り入れられる。ウィーンおよびグラーツで法学を学んでいる頃から、ウィーンの有力誌「ノイエ・フライエ・プレッセ」に寄稿した。短期間、ブダペストの「ペスト・ジャーナル」の編集に携わり、「ペ

スト・ロイド」に寄稿した。1873年フランツォースは、「ノイエ・フライエ・プレッセ」に物語やスケッチを発表し始め、それによって彼の名声は確立された。「半アジア」と題され、1876年に2巻にまとめられたこれらの作品は、写実的な、そして同情のこもった筆致で東ヨーロッパのユダヤ人の生活を描いている。このジャンルの先行者レーオポルト・コンペルトに捧げられた『バルノフのユダヤ人』（1877年）所収のいくつかの物語においては、より広汎なユダヤ人の啓蒙と西欧文化への適応の要求とが、ガリツィア地方の習俗と迷信に対する深い理解と結びつけられている。ゲッターについての彼の最良の小説は、彼の死後、1905年に出版された『道化師』である。ウィーンの「ノイエ・フライエ・プレッセ」の編集者として（1884-1886）、さらに、隔週刊の「ドイツの文学」の編集者として（1886より没年まで）フランツォースは、ドイツの文学的生活に重要な影響をおよぼし、新旧の作家たちの名声の普及に力があった。ゲオルク・ビューヒナー選集（1879）の編集者としての彼の仕事は、ビューヒナーの革命的な戯曲『ダントンの死』のマックス・ラインハルトによる上演、そしてドイツ初のプロレタリア・オペラとなった、アルバン・ベルクによるビューヒナーの『ヴォイツェック』の音楽的翻案へと道を開いた。「どの国にも、その国にふさわしいユダヤ人がいる」という言葉の出所はフランツォースである。²¹⁾

同一人物についての記述とは思えないほど、その評価をめぐるには、両者に共通点はない。『ウクライナ百科事典』の記述には「ユダヤ」への言及は一言もなく、フランツォースは「ウクライナ農民」を描いた作家であり、その代表作は『権利のための闘争』とされ、『ユダヤ百科事典』では「ウクライナ」への言及が一言もなく、フランツォースは、「東ヨーロッパのユダヤ人の生活を描いた」作家であり、その代表作は『道化師』とされている。ドイツ文学研究の分野においては、第2次大戦後ほとんど忘れかけられていたフランツォースは、その「ユダヤ」によって掬い上げられ、もっぱら『ユダヤ百科事典』の延長線上で、「ユダヤ」のみが語られ、フランツォースの

「ウクライナ」は、ソ連に飲み込まれ、ふたたび西側の視界から消えたウクライナ民族と運命をともにし、今日に至るまで忘れられたままである。

フランツォースの全体像を明らかにするためには、したがって、その「ウクライナ」が語られる必要があるが、しかしフランツォースの「ウクライナ」を語ることは、一作家の全体像を明らかにするためばかりでなく、19世紀ガリツィアの特質を語るうえからも必要であろう。「フランツォースのウクライナ」は、「ユダヤ」による「スラヴ」の「ゲルマン」への仲介であったが、それは、ガリツィアという空間を俟って初めて可能となったからである。

3 .

フランツォースが、初めてウクライナ人の文化、とくにその文学をテーマとして論じたのは、『ウクライナ百科事典』で述べられていたとおり、1877年の『小ロシア人と彼らの歌人たち』(Die Klein-Russen und ihre Sanger)という、新聞に発表したエッセイにおいてであった²²⁾。フランツォースの処女作となる最初の『半アジアより』(Aus Halb-Asien)が出版されたのが1876年であるから、フランツォースは著作活動のほぼ初めから、ウクライナ文化、とくに民謡も含めたウクライナ文学の紹介にたずさわっていたことになる。この『小ロシア人と彼らの歌人たちは』は、1877²³⁾年「半アジア」シリーズの二作目『ドンからドーナウへ』(Vom Don zur Donau)の第1巻に『小ロシア人と彼らの歌人』(Die Kleinrussen und ihr Sanger)と改題して収録されたが、1889年の同書第2版では、二分され、それぞれ拡張され、『小ロシア人の文学』(Die Literatur der Kleinrussen)と『タラス・シェフチェンコ』(Taras Szweczenko)に姿を変えている。『ドンからドーナウへ』第2版は、第1巻に『小ロシア人の文学』、第2巻には、『タラス・シェフチェンコ』に加え、『小ロシア人の民謡』(Das Volkslied der Kleinrussen)も収め、かなりの紙幅がウクライナ文化の紹介に割かれている。そのほか、フランツォースは、「皇太子の仕事」が示唆しているように、自らが編集する雑誌「ドイツの文学」(Deutsche Dichtung)にウクライナ民謡、シェフチェンコの詩を翻訳している。

19世紀のドイツ語圏においては、狭義・公式には、「小ロシア人」

(Kleinrusse) は、ロシア帝国内に居住するウクライナ人を指し、「ルテニア人」(Ruthene) はオーストリア帝国下のウクライナ人を指したが、広義には両語とも、ウクライナ人の総称として使われた。フランツォースも、ガリツィアを舞台とした小説中では「ルテニア人」を使用しているが、ウクライナ人の全体を対象とするような評論あるいはエッセイにおいては「小ロシア人」を主として用い、ときに「ルシン」(Russin) すなわちルーシ人という語によってウクライナ人を総称することもあった。そして、それぞれの地域のウクライナ人を指すときには「ロシアの」、「オーストリアの」あるいは「ガリツィアの」という修飾語によって区別した。「ウクライナ」(Ukraine) は、この時代には地方名としてのみ用いられ、民族名称としての「ウクライナ人」(Ukrainer) は、ヴォルテールには「ウクライナ人たち」(les Ukrainiens) が見られたものの、この時代のドイツ語圏では一般的ではない。先に引いた、ウィーンのウクライナ人たちによる「ルテニア展望」(Ruthenische Revue) は、1906年に誌名を「ウクライナ展望」(Ukrainische Rundschau) に改めるが、その理由を編集者はつぎのように説明する。

ルテニア語の「ルシン」(Rusyn) もドイツ語の「ルテニア人」(Ruthene) という言い方も、わが民族のうち、オーストリアに住んでいる一部の人々だけを表す名称として地方的な意味しか持っていない。わが民族の大多数はウクライナ人(ukrainisch) と自称しているが、外国ではロシア政府によって恣意的に与えられた「小ロシア人(Kleinrussen)」という間違っただけの名前で知られている。この間違っただけの名称はもちろん存続してはならないし、「ルテニア人」という名称も、なにかが歴史的な根拠があるとはいえ、しかしそもそもがオーストリア政府によって、オーストリアに住むわが民族の一部を表すために初めて特別に導入されたものであり、ウクライナ人(ukrainisch) と自称し、またそう呼ばれることを望んでいるわが民族の全体に、その名前を敷衍する正当な理由はない。民族の全体に対して使われるべき唯一正しい名称が外国でも広く一般に使われなくてはならない。そしてその名称とは「ウクライナ(の)」(“Ukraine”, “ukrainisch”,

“l’Oukraine”) である²⁴⁾

「ウクライナ人」が一般に定着するのは20世紀になってから、とくに、「ルテニア人」、「小ロシア人」という呼称をウクライナ人に付与したオーストリア、ロシア両帝国の崩壊後であった。

フランツォースは、用語の使用においては時代に制約されていたが、彼が「小ロシア人」という言葉によって指し示していたのはウクライナ人の全体であった。フランツォースは『小ロシア人の文学』において、『ウクライナ百科事典』で述べられていたように、「ウクライナ人をロシア人からはっきりと区別」し、「11世紀から1880年代にいたるウクライナ文学についての一般的な記述」をおこなったのであったが、これはドイツ語で書かれた初めてのウクライナ文学史でもあった。執筆の動機の一つは、優れた民族の文学が、いまだドイツ語圏では不当に無視されている、ということであった。

他のどの文化民族 (Kulturvolk) にもまして、私たちドイツ人は外国の文学を翻訳、評価してきた。一つの世界文学という輝かしく深甚な観念が、もしどこかで単なる夢でなくなるとしたら、それは私たちの言語においてである。それは夢ではないが、しかし美しく生き生きとした現実となるには、まだしばらく時間がかかるだろう。私たちのパルテオンに、いまだ幾人かの不滅の詩人が不在であるのは悲しいことであるが、さらに悲しいのは、いくつかの文学の全体がそっくり欠如しているということである。²⁵⁾

しかし、ただウクライナ人の「文学の全体」がドイツ語文化圏において「そっくり欠如している」ということだけが、フランツォースに『小ロシア人の文学』の筆を執らせたわけではなかった。

私たちはポーランド人の文学、ロシア人の文学とは十分に関わりを持っている。それらはまさしく私たちの努力に値するものであるし、年々それは増加している。だが両者に挟まれた文学については、私た

ちは何も知らない。これは苛酷で不当な運命である。この不幸な民族の運命の全体と同じく苛酷で不当である。²⁶⁾

すなわち、フランツォースをウクライナ文学の紹介に駆り立てたものは、ウクライナ人が負わされた「苛酷で不当な運命」に対する深い同情であった。その同情の源は、古典的啓蒙主義に基づくヒューマニズムや、同じくガリツィアの地で、ポーランド人によっても抑圧されていたウクライナ人に対する、ユダヤ人としての、被抑圧者同士の連帯感ばかりではなかった。フランツォースは、5歳の時に初めて父親から、自分がドイツ人であるということを知られ、さらにその翌年、「信仰からしておまえはユダヤ人なのだ」²⁷⁾と宣告されるが、それまでのフランツォースにとっては、彼に「歩くことと喋ることとを教えた」²⁸⁾ウクライナ人の乳母マリーニアが「全世界であり、また唯一の遊び友達」²⁹⁾であった。「6歳になるまでドイツ語を話すことができなかった」³⁰⁾フランツォースに、「全世界」はウクライナ語を通じて現れ、初めての文学体験と呼べるものも、マリーニアに聞かされたウクライナの民話であった。父親から、ドイツ人としての教育を受ける以前に、そして、ユダヤ人として自覚を持つ以前にフランツォースが生きた世界は、ウクライナ語の世界であった。ウクライナの民族と文化に対する、終生変わらぬ深い理解と関心は、フランツォースの生涯の源に発するものであった。

『小ロシア人の文学』の最も重要な課題は、その存在すら「ほとんど、あるいはまったく知られていない」ウクライナ人を自立した民族と認め、彼らの文学を独自の文学として正当に評価し、「世界文学」のなかに位置づけることであった。そのためフランツォースは、ウクライナ人の文化の根源に遡ってゆく。

北方そして東方にキリスト教をもたらしたのは小ロシア人であった。・・・『イーゴリ遠征の歌』、ネストルの『年代記』、洞窟修道院の『パテリコン』、トゥーロフのキリルの説教集は小ロシア人の言語的記念碑であり、自由で生き生きとした力強さと素朴さによってとくに優れている³¹⁾。

988年に「東方にキリスト教をもたらした」キエフ・ルーシのヴォロディーミルを「小ロシア人」と断言し、キエフ・ルーシの文化的遺産である「『イーゴリ遠征の歌』、ネストルの『年代記』、洞窟修道院の『パテリコン』、トゥーロフのキリルの説教集」を「小ロシア人の言語的記念碑」とするこの記述は、『小ロシア人の文学』が書かれた19世紀後半当時、政治的な意味を持つものであった。今日の歴史学は、10～13世紀に存在したキエフ・ルーシを、東スラヴ諸族がウクライナ、ベラルーシ、ロシアへと分化する以前の共通の祖としているが、その継承をめぐる問題は、19世紀以来、ウクライナ人とロシア人の間で議論となっていた。スプテルニーは、現代においては、「ウクライナ、ロシア双方の歴史家たちは、キエフ・ルーシを、それぞれの民族の歴史の統合的部分とみなしている」と確認したうえで、「どちらがその遺産に対してより大きな請求権を持つかという」論争の歴史をつぎのようになどっている。

伝統的なロシアの歴史家たち、とくに19世紀の法制史学派の影響を受けた歴史家たちの主張は、ロシア人が近代の歴史において、国家を形成した唯一の東スラヴ人であるから（彼らにあっては独立国家の発展が歴史的過程の原則とみなされている）、モスクワ＝ロシア国を初期の東スラヴ国家とつなげるのがもっとも首尾一貫しており意味なことであるというものであった。そして暗に、ウクライナ人とベラルーシ人は彼ら自身の近代国家を持たなかったがゆえに、彼らの歴史にはキエフ時代とのつながりはない、とされた。影響力の大きかった19世紀ロシアの歴史家ミハイル・ポゴーディンは、さらに進んで、ロシアの、キエフとの結びつきは制度的のみならず民族的なものでもあると主張した。彼の理論によれば、1240年のモンゴル人によるキエフ破壊ののち、生き残った多くの住民が南から北東、すなわち近代ロシアの中心地へと移住したという。この理論はとうに信用を失ったにもかかわらず、いまだこれを支持するロシア、非ロシアの歴史家は多い。³²⁾

ここには、19世紀から20世紀を通じて、「歴史」が「国家」に対して果たした役割を見ることができるが、「近代の歴史において、国家を形成した唯一の東スラヴ人」であるロシア人は、遡及的にすべての「ルーシ」を「ロシア」と言いくるめ、キエフ・ルーシを、排他的にロシアに直結し、それに対するウクライナ、ベラルーシの請求権を排除し、「独立国家」の「歴史的過程」に組み込むことによって、帝国の権威と正統性を支え、他の東スラヴ諸族を隷属させる根拠として利用したということである。この「大ロシア」帝国のイデオロギーは、時間的（「いまだこれを支持するロシア、非ロシアの歴史家は多い」）・空間的に大きな広がりをもち、当時のウクライナ人のなかにもポゴーディンが唱える、ロシアを中心とするパンスラヴィズムに共感する親ロシア派（Russophilen）が形成された。ポゴーディンは、19世紀前半に何度かリヴィウを訪れ、あとで見るように、オーストリア帝国に失望したガリツィアのウクライナ人を懐柔し、親ロシア派を増やしていった。そのためリヴィウは、反対派から「ポゴーディンのコロニー」と揶揄を込めて呼ばれるほどであった³³⁾。マーゴチが述べているように、ウクライナ人はハプスブルク帝国の他のスラブ民族に比べ、民族統合のプロセスが遅れ、「チェコ人、セルビア人、クロアチア人、スロヴァキア人が1850年代までには民族的イデオロギーを完成していたのにたいして、ガリツィアのウクライナ人たちにとっては、そのプロセスはちょうどその頃、緒に就いたばかりであった。1890年代にいたるまで、ガリツィアのウクライナ人知識人たちは共通の民族的アイデンティティを作り出すために奮闘したのであった」³⁴⁾が、そのなかで、キエフ・ルーシを請求する声が高まった。さらに、スプテルニーを引く。

19世紀にウクライナ人たちが民族意識に目覚めると、それにつれて、「かつてのキエフの栄光」をロシアが独占していることに対する憤りもまた大きくなった。「一般的なロシア史の図式」に対する最も説得力のある反論は、ウクライナの最も有名な歴史家フルシェフスキによって1906^(ママ)年に提出された。徹底した人民主義者であったフルシェフスキは、まず国家形成期に関する歴史研究を疑問に付した。彼にとっては、祖先の地に暮らしていた同族の人々に蓄積した経験が

歴史の焦点であった。彼の議論は、ソヴィエトのいくつかの人類学研究もこれを支持したのであったが、6世紀のアンテス人の時代から20世紀にいたるまで、大部分のウクライナ人を本質的に同じ民族的血統が支配している、と想定するものであった。モンゴル人の攻撃の結果、人々がウクライナの中心部を離れたとしても - フルシェフスキは荒廃と移住の程度を控えめに見積もっているが - 、比較的平穏になったときに彼らは戻って来たのだという。明らかにノルマニストではなかったフルシェフスキによれば、ウクライナ人はキエフの発展に重要な役割を演じたポリャーニン人たちのほとんど直系の子孫であり、それゆえ、この経験がウクライナ人の歴史のなかにもっとも大きく広がっているという。³⁵⁾

フランツォースの『小ロシア人の文学』は、キエフ・ルーシの遺産をめぐる、ウクライナ人とロシア人の論争のさなかに書かれている。『イーゴリ遠征記』、ネストルの『年代記』が、「不当に」大ロシア人たちに独占されていた経緯をフランツォースもつぎのように記述している。

ネストルの年代記の最初の版（1802-1809）とイーゴリの歌の最初の版（1800）が出版されたとき、小ロシア人の文学は存在していなかったし、小ロシアの民族も存在していなかった。その当時、存在していたのは、「墮落した方言を話す農民たち」だけであった。この記念碑的文献が彼らのものかもしれないという考えは、最初の編集者たちにとっても、最初の読者の世代にとっても、途方もなく遠いものであった。まったく当然のこととして、これらは強大で、支配的で、主導的な種族のものとなった。だが何世代にも渡って、不当に、しかし問題とされることもなく堅持されてきた所有物を、ふたたび彼らから奪い返すことは、当然のことヘラクレスの仕事にも匹敵する困難であったし、今でもそうである³⁶⁾。

ウクライナ人は当時、「強大で、支配的で、主導的な」ロシア人にとって

は「墮落した方言を話す農民たち」に過ぎず、すなわち、「民族」とはみなされず、そのため、ウクライナ人とキエフ・ルーシの「記念碑的文献」とのつながりは問題にもされなかったということである。19世紀の後半に、「『イーゴリ遠征の歌』、ネストルの『年代記』、洞窟修道院の『パテリコン』、トゥーロフのキリルの説教集は小ロシア人の言語的記念碑」であると断言することは、「共通の民族的アイデンティティを作り出すために」、「ヘラクレスの仕事にも匹敵する困難」に挑んでいたウクライナ人知識人たちに対する連帯の表明であった。ちなみに、フルシェフスキの『一般的な“ロシア史”の図式と東スラヴ諸族の歴史の合理的構成をめぐる問題』が現れた1904年にフランツォースは世を去っている。

『小ロシア人の文学』は、表題の通り、ウクライナ人の文学の歴史ではあるが、民族がたどった歴史の記述にかなりの紙幅が割かれている。「この民族を襲った禍に言及することなく彼らの詩人たちの特徴を語ることはできない」からであり、ウクライナ人の文学の歴史とは、「この民族を襲った禍」の歴史にほかならず、その文学は「民族の苦悩と運命の歌」³⁷⁾であった。

ねばり強く、忍耐強くこの民族は自らの運命を耐えている。いかなる希望によって元気づけられることもなく。だが彼らの苦悩の道を彼らの詩人たちの嘆きの歌が同情をもって導いてゆく。

彼らの詩人たちを思うことなく小ロシア人たちの運命に言及することはできない。というのもこの民族が人の心を揺さぶる場所は、彼らの詩句をおいてほかにないからである。そして同様に、この民族を襲った禍に言及することなくこれらの詩人たちの特徴を語ることはできない。両方向に向けてここでは解釈がなされる。そしてそれは西側の読者に、少なくとももっとも大切なことを伝えることになるだろう。³⁸⁾

ウクライナ人のアイデンティティと文化的独自性の主張は、ロシア人に対してばかりでなく、ポーランド人にも向けられなくてはならなかった。モンゴルによるキエフ破壊（1240年）について、ウクライナの地はリトアニアに征服され（1363年）、リトアニアとポーランドのルブリンの合同（1569年）

によって、その後数世紀にわたるポーランドによる本格的なウクライナ人支配が開始される。ポーランド治下のウクライナ人をフランツォースは次のように要約する。

だが、そのとき小ロシア人の運命にとって決定的な意味を持つことになる政治的な事件が起きる。リトアニア人とポーランド人の同盟である。両者の関係が密になり、ポーランドの影響力が強くなるにしたがって やがて両国はポーランドの統一国家となったのだが、支配されているものの状況は厳しいものになっていった。その昔、モンゴル時代以前に数知れぬ戦いの中で噴出した父祖伝来の遺恨のためばかりではなく、それ以上に政治的な理由から、ポーランド人にとっては、自分たちのかなり均質な国家の中に存在する小ロシア人たちの特異な民族性は、目に刺さった棘たらざるを得なかった。異端に敵対するカトリックの狂信、ルシンの農民層が持っていた、古くからのスラブ的民主主義組織に対する貴族支配層の恐れ、これは今日に至るまでほとんど認知されてこなかったが、しかし確かに深刻な要因であったが、重要な動機としてそこに加わった。そこで両民族の間で、互いに一歩も引けぬ執拗で未曾有の戦いが始まった。強大な民族による、身を守る術のない民族に対する残虐な戦いであったが、それにもかかわらず、この戦いは前者の完全な勝利には終わらなかった。ここは詳細を考察する場ではないので、結末を記すだけで十分である。ポーランドの方がまさったのであった。自由な農民たちは臣民となり、そればかりか次第に、もちろん非常にゆっくりとではあったが、恭順な農奴となっていった。上層の小ロシア人たちは支配層と結びつき、ポーランドのシュラフタと姻戚関係を結んだ。西小ロシアは政治的な体制にしたがってポーランドの州となったが、ポーランド共和国の他の地域とそれらの州との違いは、約まるところ農民・庶民の言語と信仰だけであった。だがこの違いと民族性自体を取り除くことはポーランド人たちにもできなかった。小ロシア人の言葉は農民と教会の言語となったが、しかしそのようなものとして維持された。庶民たちと農民たちはねば

り強かったし、ギリシャ正教の神父たちの数も少なくはなかった。ポーランド人たちが田舎言葉（lingua rustica）といって蔑んだ言語は、実はもっとも純粹で響きの美しいスラヴ語であった。³⁹⁾

「ルシンの農民層が持っていた、古くからのスラブ的民主主義組織」とは、たとえば、フランツォース自身も『ピアラの村長』や『権利のための闘争』で描いているような、村の長老を選ぶ際の直接選挙、あるいは、コザックがヘトマンを選ぶ際の選挙制、全員集会での合議制⁴⁰⁾などが想定されている。また、ウクライナ人をポーランド人から区別した信仰とは、キエフ・ルーシ以来のギリシャ正教と、16世紀末に成立した合同教会（ユニエイト＝ギリシャ・カトリック）とであったが、いずれもローマ・カトリックのポーランドの教会からは「目に刺さった棘」として、改宗の強制など激しい迫害にあっていた。ウクライナ教会の「ギリシャ正教の神父たち」は、「異端に敵対するカトリックの狂信」に対して盛んに、大量のパンフレットを発行して抵抗した。「その目的は信仰のみならず、危機に瀕している民族性をも保護すること」⁴¹⁾であった。17世紀の中頃からおよそ1世紀の間、ウクライナ・コザックはフメリニツキイ、マゼッパらの指導者を先頭にポーランド、ロシアとの抗争が断続的に続く時代を迎える。フメリニツキイとロシア皇帝アレクセイ・ミハイロヴィッチの間で結ばれたペレヤスラフ協定（1654年）は、ウクライナ人たちの間に、「ようやく400年ぶりにふたたび、しばらくの間は完全に自分たちの力で、自ら選んだ指導者のもとで、自由な独自の民族として生きているという意識」⁴²⁾を生み、「栄光に満ちた時代の記憶は、それにつづく時代の重苦しい抑圧を耐えるのを支えた」⁴³⁾のであった。第1節で引いたヴォルテールの『シャルル12世の歴史』が述べているのはこの頃のウクライナである。「これらの戦いが、この民族の文学的・学問的努力に対して与えた直接的な影響は大きかった。それらは、民謡の無尽蔵の素材になったばかりでなく、創作詩や歴史記述を新たに生みだし」⁴⁴⁾、ウクライナ人の文学は「第二の黄金時代」を迎える。すなわち、「フメリニツキイをモーゼとして称えるザムエル（サミイロ）・ヴェリチコの年代記」⁴⁵⁾、そして、おもにコザックの栄光や「民族を襲った禍」を主題とし、民族楽器バンドゥーラやコブ

ザの伴奏で吟唱される「ドゥマ」という叙事詩の隆盛をフランツォースは挙げる。これらのドゥマは、「印刷されることも、書きとめられることさえもなく」⁴⁶⁾、匿名の作者の手になり、匿名のコブザール、すなわちコブザ弾きの吟唱によって広まった。このような形でウクライナ語は、「農民と教会の言語」として維持されていったのである。

18世紀末のポーランド分割以後、ロシアの支配下に入ったウクライナでも「農奴制が公式に一般的に施行され、土地は、過去の自治の痕跡をすべて消し去るために、恣意的な境界線によって県に分割され、ザポロージェのコザック組織は解体され、大ロシアの言語を身につけることが義務とされ、小ロシアの言語を学ぶことは犯罪とされた」⁴⁷⁾という状況下、「ロシアの検閲を通過した最初の小ロシア語の作品」⁴⁸⁾として、1798年にコトリャレフスキの『エネイーダ』が現れる。

この本は10年の間に3度大量に版を重ねたが、教育を受けた人間が数百名という民族にあっては法外な、おそらくは前例のない成功であった。教員、豊かな農民は、愛する母語が印刷されているのを読めるといふ、ただそれだけのために、みんなこの本を買い求めた。シェフチェンコを除けば、小ロシア人の中でこの戯作の著者イヴァン・コトリャレフスキほどポピュラーになった詩人はいない。『エネイーダ』の多くの個所が人々の口に膾炙したばかりか、諺にもなった。⁴⁹⁾

タイトルから想像できるとおり、これは「ヴェルギリウスのエネイーダに基づく、ブルーマウアー風戯作」⁵⁰⁾であった。フランツォースは、この作品が検閲を通ったについては、「“ホホール” (=ロシア語でウクライナ人に対する蔑称 - 伊狩) の弱さと優柔不断、疑い深い性格と酒好き、すなわち小ロシア民族の民族的欠陥が嘲笑され弾劾されており、そのためこの作品は民族性を強めるものではなく、笑いものになっていると政府は考え、印刷を許可してもよいと信じたのであった。著者が国家公務員として示している立派な志操も検閲の許可にはよい効果があったかもしれない」⁵¹⁾と述べ、ロシアにおける検閲は1846年までは、一貫性を欠く「極めて幅のある作業」⁵²⁾で

あったとつけ加える。

それでも民族としての自覚を促し、大ロシアの軛からの解放と自由を歌う「シェフチェンコの大胆さ」⁵³⁾は、厳しい処罰を免れようがなかった。1846年に詩人のシェフチェンコ、歴史家コストマーロフ、小説家で、「散文のシェフチェンコ」⁵⁴⁾といわれたクリーシらウクライナ人たちがキエフで秘密結社キリル・メトディオス団⁵⁵⁾を結成したが、すぐに全員が逮捕され、「1847年のクリスマスを、ツァーの帝国の小ロシア人作家たちはみんな監獄で祝った」⁵⁶⁾のであった。「古い小ロシアの“ブラートストヴォ”(=ウクライナ語で兄弟団、同胞団の意 伊狩)の伝統につらなるこの団体の目的は、政治的なものではなく、小ロシアの小学校制度の組織化、民族的著作の出版、民謡、伝承、手稿の蒐集など、民族的・文化的なものであった」⁵⁷⁾が、彼らはウクライナ語で書くことを禁じられたうえ、禁固刑のあと、クリーシは1850年まで、コストマーロフは1856年まで、そしてシェフチェンコは、無期限の流刑にあった。「『われわれの文学の歴史は殉教者の索引であり囚人の目録である』とかつてロシア人のゲルツェンは述べたが、この言葉はモスクワ人(ロシア人 伊狩)以上に小ロシア人に当てはまる」⁵⁸⁾、とフランツォースはロシア帝国下のウクライナ人の文学活動を要約する。ロシア政府はその後さらにウクライナ人とウクライナ文化に対する圧迫を強め、1876年のエムス法⁵⁹⁾によりウクライナ人は、「民族への帰属がすでに犯罪」⁶⁰⁾とされたのであった。

4 .

ウクライナ人の禍の歴史を列ねる『小ロシア人の文学』のなかで、ポーランド分割によってガリツィアを領有したオーストリア帝国はウクライナ民族の庇護者として描かれる。

ハプスブルク家は、ウクライナ人たちにとっては、ツァーたちよりも優しい主人であった。ポーランド人たちに対抗する力を手元に保持したいという政治的な理由から、農民たちは、彼らの主人の勝手な振る舞いから保護された。ガリツィアの小ロシア人たちの民族教育への努

力も、オーストリア政府は決して阻害しようとはせず、逆にそれを、適切なドイツ的教育施設を通じて、無教養な人々を文明人へと教育することによって、おおいに促進したのであった。⁶¹⁾

ちなみにフルシェフスキも、ハプスブルク支配に関してはほぼ同じ評価を下している。

オーストリア支配下に入ったウクライナの地域においては、新しいオーストリア政府が、ウクライナ人農奴の負担を軽くし、彼らに対するポーランド貴族のこれまでの無制限な権利を制限し、また町や村の人々、とくに聖職者たちに対してより良い教育を提供するための措置をいくつか講じた。オーストリア支配下のガリツィアがおかれた位置は、西ウクライナにおけるウクライナのルネサンスの始まりであった。⁶²⁾

1772年にガリツィアを併合すると、ヨーゼフ2世は、農奴の賦役を軽減し、ポーランド人によって迫害されてきたウクライナ人の合同教会を「ギリシア・カトリック」と呼び、ポーランド人の「ローマ・カトリック」と対等に置いた。またマリア・テレジアは、ウクライナ人の聖職者たちに対してよりよい教育を提供するために、1774年にウィーンの聖バルバラ教会をギリシャ風典礼にふさわしく改装し、隣接する部屋に、ウクライナ人聖職者のためのゼミナール、バルバレウムを開設した⁶³⁾。一般の教育制度に関しても、たとえばヨーゼフ2世が1777年にガリツィア総督に対して下したつぎのような君主令に、「ポーランド人たちに対抗する力を手元に保持したいという政治的な理由から」、ウクライナ人を優遇するオーストリアの姿勢は窺うことができる。

ドイツ語の普及を考慮しなくてはならない。ポーランド語の改善にはしかし特別な考慮を払ってはならない。・・・同様に学校の教科書を最善の方言に従って地方語(Landessprache)に翻訳する必要がある。それはわれわれが地方語を根絶やしにしようとしているなどと思わせ

ないためであり、同時に地方語を廃止するなどということはできない相談だからでもある。少なくとも初めは地方語で指示を与えるということなしにドイツ語を導入することなどほとんど不可能であろう。・・・住民の3分の2におよぶルテニア民族を新たな学校制度から決して排除することなく、ガリツィアにおける学校規則は徹底して、したがってギリシア・カトリック教会の子供たちとラテン教会の子供たち、アルメニア教会の子供たちとを等しく考慮して作られなくてはならない⁶⁴⁾。

「ルテニア人たちの特別な庇護者」であったヨーゼフ2世はまた、1784年に創設したレンベルクのドイツ語大学に多数のウクライナ語による講義を設置したが、ポーランド語の講義は一つも設置しなかった⁶⁵⁾。

「東方への文化の伝達」(Culturtragen nach Osten)⁶⁶⁾、ドイツ文化による「半アジア」の啓蒙を自らの使命としていたフランツォースの眼には、「ドイツ的教養」を身につけたウクライナ人自身によるウクライナの啓蒙は、自らの理想の実現と見えた。フランツォースは、ドイツ的教養の成果を数え上げてゆく。たとえば、民謡、伝承、風習の蒐集を通じて、19世紀前半、ウクライナの文学的再生を推進したシャシュケヴィッチは、「1784年にヨーゼフ2世によって創設されたレンベルクのドイツ語大学で」⁶⁷⁾、「ドイツ的な教育を受け、ドイツの精神生活の成果にきわめて深く通暁し、いかなる手段によって民族精神を目覚めさせ、死に絶えた文学を新たに甦らせることができるか」⁶⁸⁾ということを学び、実践し、彼が1843年32才で夭死したのちは、グレゴール(フリホリイ)・イルキエヴィッチ、イヴァン・ヴァヒレヴィッチ、ヨーゼフ(ヨースフ)・レヴィツキらがシャシュケヴィッチの衣鉢を継いだのであったが、彼らも「終始、ドイツ的教養を基礎としていた」⁶⁹⁾と付け加えることをフランツォースは忘れない。あるいは、つぎのようなかたちでも、オーストリア帝国の寛容は、同時期のロシア帝国のウクライナ人政策と対比的に称賛される。

オーストリア政府は1840年から、ウクライナ語で書かれた優れた民族

的な書物に対して賞を出すことを始めたが、ツァーがこの言葉で書かれた優れた詩に対して与えたのは、鞭であり、軍服であり、ウラルの鉱山での労働であった。⁷⁰⁾

フランツォースは、決してウクライナ人たちの政治的な独立を支持したのではなかった。諸民族がドイツ文化によって自らに目覚め、各自の文化を発展維持させながら、ドイツ文化の国家オーストリア帝国のもとに平等に共存している状態こそが、フランツォースにとってあり得べきガリツィアの姿であった。

しかし、『小ロシア人の文学』執筆時には、ガリツィアのヨゼフィニズムは、ポーランド人の反攻の前にとくに破綻していた。すでにヨーゼフ2世の二人の後継者レーオポルト2世とフランツ1世が、ガリツィアのポーランド人たちの抵抗に屈し、貧しいウクライナ人農民層をユダヤ人やポーランド人による搾取から保護していた、ヨーゼフ2世による「醸造・蒸留酒製造販売法」⁷¹⁾や「製粉所法」を廃止し、1808年にはレンベルク大学におけるウクライナ語による講義も中止された⁷²⁾。さらに1848年の三月革命を機に、帝国内のチェコ人、ハンガリー人と並んでガリツィアのポーランド人たちも、高揚する民族意識を背景に自由と政治的権利拡大の要求を強めてゆく。このときウクライナ人たちも、リヴィウの「ルテニア最高ラダ」に結集するが、ときの内務大臣フランツ・シュタディオンは、ポーランド勢力との妥協を選んだため、自由を求めるウクライナ人たちの声は黙殺された⁷³⁾。

ガリツィアでも道はひらけ、そこでは1848年以來、強い民族意識が生まれ、バッハの反動でさえ、ガリツィアは自分たちのものであるというポーランド人のフィクションを押さえることはできなかった。⁷⁴⁾

1852年にウィーン政府がガリツィア総督にポーランド人貴族のゴウホフスキーを任命すると、ガリツィアのポーランド化は一気に加速する。法廷の言語はラテン語からポーランド語に変更され、ウクライナ人たちのキリル文字は公的な書類においては禁止される。さらに1867年にハンガリー人たちがア

ウスグライヒによって事実上の独立を獲得したのをうけ、翌1868年に、ガリツィアのポーランド人たちも、領邦議会において、いわゆる「ガリツィア決議」⁷⁵⁾を採択し、ウィーン政府に対してハンガリー同様の特別な地位を要求した。この決議は翌年ウィーンの下院に提出されるが、立法化されるには至らなかった。しかし4年にわたる政府との攻防の末、ポーランド人たちは中央政府に、無任所ではあったが「同郷大臣」(Landsmannminister)というポストを獲得した。ヴェネディクターは、ガリツィア決議の結末をつぎのようにまとめている。

政府は政令や、領邦法、あるいは行政措置によって彼ら(ポーランド人たち 伊狩)の希望に沿うようにした。とくにポーランド語は州のいたるところで優遇され、とくに官庁の内務において、そして学校においてそれは影響をあらわした。さらに財政の分野においてポーランド人たちに対して歩み寄りがなされた。帝国末期の数十年においては莫大な金額がガリツィアの鉄道建設、道路建設に対して、また文化的目的、行政上の目的のために提供された。そしてそれは、もっぱらポーランド人の役にたったのであり、ルテニア人には利益をもたらさなかった。というのも、ルテニア人たちは、州行政においてほとんど影響力を持っていなかったからである。ガリツィアのただ一人の主人は事実上ポーランド人であった⁷⁶⁾。

フランツォースも、1876年の処女作『半アジアより』の序言で、ガリツィアがふたたびポーランド化し、ポーランド人が「ガリツィアのただ一人の主人」になってしまった状況をつぎのように記している。

ウィーン政府の命令は、すでにレンベルクの総督府で半ば雲散し、管区長の政務室で霧消してしまう。ポーランド人の意志が決定を下す。ガリツィアを統治しているのはウィーンの内務省でもなければ、レンベルクの総督府でもなく、ポーランド民族党だけなのである。⁷⁷⁾

「ガリツィア決議」以降、すなわち、「1868年にオーストリアがウクライナ人たちをポーランドに引き渡して以来」⁷⁶⁾、ガリツィアのウクライナ人たちはオーストリアに失望し、それは、先に述べたように、ポゴーディンのパンスラヴィズムが介入する格好の土壌となった。フランツォースも、ガリツィアにおいては、「ドイツ文化は完全に地に墜ち」、「ドイツ文化の国家オーストリアの夢は終わった」⁷⁹⁾ことを承認する。それはフランツォースの夢の終わりでもあり、同時にガリツィアのウクライナ人たちの夢の終わりでもあった。「どの国にも、その国にふさわしいユダヤ人がいる」とは、フランツォースはまたウクライナ人についても言い得た。

同時代のウクライナ文学の状況について、フランツォースはもっとも優れたガリツィアの作家として、『ボア・コンストラクター』において「非常に力強くそして独自の才能を發揮した」イヴァン・フランコを挙げ、また、ロシアにおいても、「抑圧がひどければひどいほど、抵抗も力強いものとなった」⁸⁰⁾と述べ、1882年にキエフでウクライナ研究の月刊誌「キエフの古代」⁸¹⁾（
）が創刊され、1885年には、政治的な詩が削除された「懲罰版」(editio castigata)としてではあったが、シェフチェンコの新たな作品集が出版されたことを伝え、全5章100頁余りの『小ロシア人の文学』はつぎのように結ばれる。

ガリツィアにおいてはポーランド人に、ツァーの帝国においては大口シヤ人に抑圧され、しかしそれでも彼らは自分たちの民族、民謡、文学を守ったのであった。彼らは従属すれども消滅はしない。そして実際、いかなる暴風も彼らをその場から吹き飛ばすことはないであろう⁸²⁾。

そしてその間、フランツォースが「天才」と呼びもっとも高く評価した詩人がシェフチェンコであったが、この詩人については、すでに述べたように、フランツォースは稿を改めている。

5 .

シェフチェンコ (, 1814-1861) を初めてドイツ語圏に紹介したのは、オブリスト (Obrist, Johann Georg 1843-1901) であった。オブリストはチロル生まれの文学研究者でありジャーナリストでもあったが、1868年から1873年までチェルニフツィ (チェルノヴィツ) の実科ギムナージウムで教鞭を執り、その間1870年に、シェフチェンコの詩14編の翻訳を含む『タラス・グリゴリエヴィッチ・シェフチェンコ - 小ロシアの詩人』⁸³⁾ を出版したのであった。しかし、ドロシェンコによれば、オブリストがシェフチェンコの評伝を書く際に利用したポーランド人G. バタグリアのシェフチェンコ論には誤りが多かった上、詩の翻訳も、「オブリスト自身はウクライナ語がほんの僅かしかできなかったため、ウクライナ人の友人たちが逐語訳し、それに基づいてオブリストが翻案を企てたものであった」ため、「致命的な誤り」をいくつか含んでいた⁸⁴⁾。フランツォースは、1877年に『小ロシア人と彼らの歌人たち』で初めてシェフチェンコを取り上げる。すでに述べたように、同年、それは『小ロシア人と彼らの歌人』と改題され、最終的には1889年に『ドンからドーナウへ』第2版所収の『タラス・シェフチェンコ』へと姿を変えたのであったが、ドロシェンコによれば、「フランツォースはウクライナ語ができ、翻訳に際しても他人の力を借りずにすんだので、オブリストに較べれば有利であった。彼はシェフチェンコの詩を原典で読んでいた。一方、彼はロシア語もできたので、シェフチェンコについてはしっかりとしたロシア語文獻を利用することができたので、オブリストのようにポーランド語の伝記や批評に依存せずに」⁸⁵⁾すみ、その結果、「フランツォースのシェフチェンコ研究は、1916年にスウェーデンのスラヴィスト、アルフレード・イエンセンによるドイツ語のシェフチェンコ研究が現れるまで、このウクライナの詩人についてのもっとも徹底したドイツ語での研究であった」⁸⁶⁾という。

フランツォースの『タラス・シェフチェンコ』の動機はつぎの文に明白である。

タラス・シェフチェンコは、自らが天才であるというばかりでなく、彼の中にいわば小ロシア人の詩的才能が具現している。彼の詩神が、小ロシア人の文学のあらゆる特徴を一つにしている。彼の特徴を描きだす者は、彼の民族の詩的努力の全体像を述べることになる。その意味で、この文章は、小ロシア人の文学に関する文章を完成するものとみなされなくてはならない。しかしまた彼の運命を思うと、彼はひとつの典型的な形姿なのだ。彼の人生は、多かれ少なかれすべての小ロシア人詩人のそれなのだが、ただタラスは同胞詩人たちに較べ、より多く努力し、より多く耐え、より多く創作したというだけである。⁸⁷⁾

すなわちフランツォースは、「小ロシア人の文学に関する文章」、すなわち『小ロシア人の文学』において、「民族を襲った禍」を通してウクライナ人の文学を語ろうとしたのがであったが、『タラス・シェフチェンコ』においては、「小ロシア人の文学のあらゆる特徴」を一身に具現している詩人シェフチェンコのなかに「小ロシア人たちの運命」を読もうとしている。その意味で『タラス・シェフチェンコ』は、『小ロシア人の文学』を補完し、両者は互いを相補する。すでにフランツォースは『小ロシア人の文学』において、「その民は沈黙しているが、彼らの詩人たちの歌からは、民族の苦悩と運命の歌が響いてくる。これらの詩人たちは神の恩寵の詩人たちであり、彼らのうちの一人は、不滅の天才である」⁸⁸⁾とシェフチェンコについて述べていた。シェフチェンコは、その詩においてのみならず、その人生においてもウクライナを体現し、民族の運命を象徴する「典型的な形姿」であった。つぎのような言葉でもって、フランツォースはシェフチェンコの生涯を語り始める。

その伝記は、まるで一編の小説のようであるが、しかしその小説は、主人公を夜から光の世界へではなく、夜から夜へと導いてゆく。そして、これは一人の優れた、偉大な人間の心臓の血でもって書かれている。私たちは、その苦痛と運命とに畏敬を払いつつ、事実だけを手短かに報告しておきたい。⁸⁹⁾

タラス・シェフチェンコは、1814年2月25日に、ロシア支配下のキエフ県のモリンツィ（現ウクライナ、チェルカッシ州）に生まれた。父は、家族ともども、「ドイツ人地主エンゲルハルト」⁹⁰⁾の農奴であった。「8才まで私（シェフチェンコ）は天国にいた」⁹¹⁾が、母親が亡くなり、継母がやってくると、「天国は地獄になった」⁹²⁾。父親は、シェフチェンコを継母から守るために、彼を一人の教師に委ねる。そこで彼は読むことを学ぶのであるが、しかし彼にとってより重要であったのは、教師の家の隣にあった修道院であった。その修道院は1768年の、ポーランドに対するコザックの反乱⁹³⁾の際に拠点となった建物であった。当時の流血の日々を目撃していた老修道士から、そのときの模様を聞かされ、少年シェフチェンコは、たいへん感動する。「私はそのときすでに、この話をできるだけ多くの人々に語り聞かせようと決心した。」⁹⁴⁾この決心がのちに、彼の叙事詩『ハイダマキ』（ ）に結実することになる。11歳の時に父を亡くし、彼は自活の道を見出さねばならなかったのであるが、農奴として就きうる最高の職が教会のコーラス隊であるという話を聞き、シェフチェンコは合唱の修行に通う。よほど才能があったのであろう、彼は進歩すればするほど、自分の失職を恐れた教師から虐待を受けたのであった。「人生で初めて出会った専制君主であった」⁹⁵⁾と、シェフチェンコはその教師を表現し、「一人の人間が他の人間に加える、あらゆる抑圧というものに対する、生涯にわたる嫌悪が、そのとき私のなかに吹き込まれた」⁹⁶⁾とシェフチェンコは回顧している。そのころ、絵も描き始めるが、しかし身分としては農奴であることに変わりはなく、豚飼いを主な仕事としている。主人の代がかわると、若いエンゲルハルトは、読み書きができ、絵も描け、歌も歌える15才の豚飼いを「部屋つきコザック」(Zimmerkosak)すなわち下男として屋敷の中の仕事をさせる。時間にゆとりのできたシェフチェンコは、「会計係から盗んだ鉛筆でもって、これもまた盗んだ小銭で買った紙に」、客間の絵画を模写して過ごした。シェフチェンコの絵の才能に気づいた周囲の人々に説得され、領主のエンゲルハルトは、1832年にシェフチェンコを4年間の予定でペテルブルクの絵師セライエフのもとに修行に出す。その地で、シェフチェンコは、司祭のソーセンコ(ソーシェンコ)

詩人のシュコフスキー（ジュコフスキー）、著名な画家ブリュローフらと交遊を結び、彼ら、シェフチェンコの才能を高く評価する友人たちは、シェフチェンコを農奴身分から解放すべく手を尽くす。結局、ブリュローフが、友人のシュコフスキーの肖像を描き、それを競売にかけて得た2500ルーブルで、「1838年4月22日、私の自由は購われたのであった。」⁹⁷⁾そしてシェフチェンコは、ペテルブルクの美術アカデミーに通うことになる。そのころ、「若き芸術家としての精進と自由とに熱中しながら、シェフチェンコは、自分の幼年時代、そして蹂躪されている同胞を思い出し」⁹⁸⁾ながら詩作を始めたのであった。それは、「追放された言語を使っただけでなく、自由への大胆な讃歌であり、外国の主人たちによってウクライナの農民たちにもたらされた悲哀の感動的な描写であった」ので、「友人たちはひかえるように忠告したが、シェフチェンコは、自分の胸を満たしているものに韻律を与え続けたのであった。」⁹⁹⁾1840年に彼の最初の詩集『コプザール』()が出版される。この小さな詩集は、大口シアの批評家からは嘲笑され、同胞からは熱狂的に迎えられ、ロシア政府は彼を監視下においたのであった。その後シェフチェンコは故郷に戻る。そこでも警察による追及は耐え難かったが、状況が厳しくなればなるほど、彼の詩の響きはいつそう大胆に、激しいものになっていった。そのような逆境下で彼の代表作ともなった長大な叙事詩『ハイダマキ』が生まれた。1847年に、すでに前節で触れたキリル・メトディオス団の事件が起こり、シェフチェンコも、一兵卒として、オーレンブルクへ追放される。しかしシェフチェンコは沈黙することなく、その地でもっとも大胆で辛辣な「警告と復讐を歌った詩」¹⁰⁰⁾が書かれ、それらはガリツィアへ送られ、「偉大な自由時代」¹⁰¹⁾に守られて、印刷されたのであった。「たびたび彼はロシアの官憲によって拷問を加えられたが、打擲も彼の肉体を引き裂いただけであり、精神まで殺すことはできなかった。」¹⁰²⁾1857年に友人たちの長年の嘆願が実り、彼は解放されるが、ペテルブルクに住むことを命じられる。1859年には、念願のウクライナ再訪が許可され、ドニプロ河畔に家を建てて晩年を過ごしたいという希望を抱く。農奴の娘ハリータに求婚するが拒絶される。これが、この詩人の、この世での最後の苦悩となった。その後詩人がペテルブルクで病に倒れると、その知らせはウクライナ中に伝わり、

彼の命名日のために、ウクライナ人が住むすべての町や村から、祝いの品、電報、使者が送られたが、彼はその日を祝うことができずに、1861年2月27日、47歳で息をひきとる。友人たちは、ウクライナの地に葬られたいというシェフチェンコの「遺言」¹⁰³⁾を実現すべく奔走し、彼の遺体はカーニフ（現ウクライナ、チェルカッシ州）に葬られたのであった。

農奴として生まれ、ウクライナ語で書くことを禁じられ、10年におよぶ流刑に処せられたシェフチェンコの人生は、確かにウクライナ民族の運命そのものを象徴するものであった。詩人としてのシェフチェンコについては、「小口シア人たちはシェフチェンコにおいて一人の天才、すなわち、それまでは匿名の人々が個々別々に行ってきたすべてのことを一人で成し遂げることのできる天才を与えられた」¹⁰⁴⁾であり、その詩は、素材においても音調においても「民謡を一步も踏み越えることなく」¹⁰⁵⁾、シェフチェンコは、「民衆のなかから、民衆のために詩作し」¹⁰⁶⁾、その意味で、まさに「不滅のコプザール」¹⁰⁷⁾であったと要約される。フランツォースは、シェフチェンコの詩を、「政治的叙情詩」、「傾向的ではない、牧歌的、森とステップの愛の歌」、「社会的風俗画」、「歴史的叙事詩」の4つのジャンルに大別するが、それも民謡の多様性に対応するものであり、しかもそのいずれもが、他のジャンルの上に置くことはできないと称賛し、「私の運命」、「コーカサス」、「溺死した女」、「百合」、「ハイダマキ」などの詩をパラフレーズしながら紹介してゆく。オプリスト、ハーバーマン（Habermann, Leo）、フランクヴェル（Frankwell, Viktor Umlauff von）らによるドイツ語への翻訳も紹介されるが、原語につきすぎてドイツ語ではなくなっているか、あるいは逆に原詩の根源的な力が損なわれてるとして、いずれも評価は否定的である。「ときに鋭く私たちの耳に立ち、衝撃的な自然音と響く根源的な力に満ちたこれらの詩をわれわれの文化言語（Kultursprache）でなぞることは、翻訳術のもっとも困難な課題の一つ」¹⁰⁸⁾であり、「この課題を完全に解決することは不可能であろうと私は確信している。おおよそのところであれば、両言語を完全に習得した、真に優れた詩人にだけは上手くゆくかもしれない」¹⁰⁹⁾と述べ、フランツォースは『タラース・シェフチェンコ』においては翻訳を差し控える。

そしてフランツォースは、『タラース・シェフチェンコ』を、つぎのよう

な、コストマーロフのシェフチェンコ論からの引用によって締めくくっている。

「シェフチェンコの詩は、民衆全体の詩である。しかしそれは、民衆自らがその匿名の創造の中で作ってきた詩であるというばかりではなく、もし独創的な創作力を与えられていたならば、民衆自らが創造せずにはいられなかったであろう詩なのだ。あるいはこう言い換えたほうがよいかもしれない。それは民衆自らが、自分たちで選んだ者、自分たちの真の指導者の口を通じて創造した詩なのだ。シェフチェンコのような詩人は民衆の生活を描き出すのみでなく、また民衆の感情や行動を歌うのみでなく、彼は、民衆の指導者であり、新たな生への覚醒者であり、予言者なのだ。」¹¹⁰⁾

フランツォースによるシェフチェンコの翻訳は、現在知られている限りでは詩一編だけであり、それは、『タラス・シェフチェンコ』の5年後の1894年に、自らが編集する「ドイツの文学」誌に発表された。シェフチェンコの本詩は無題であるが、フランツォースは、「なにも期待するな」というタイトルを振っている。原詩とフランツォースの翻訳は以下の通りである。

i	ii,	青春の歳月は去った
i	ii	希望から冷たい風が
i	!	すでに吹き始めた。冬だ!
	i	ひとり冷たい小屋に坐っているがよい
	i,	静かに語り合える者もなく、
i	,	相談する者もない。いない、
i	! ii	誰一人としていない!
	i	それでもひとり坐っているがよい。希望が
	ie...	愚か者を欺き、笑いものにし
i	e,	その眼を霜で固め
ii	ie,	誇り高い思いを、

i ! 雪のようにステップで撒き散らすまで!
 i . ひとりきりで片隅に坐っているがよい。
 - i ii 春を待つな、神聖な運命を!
 i i それはもう決してやってくることはないだろう
 i , お前の庭を緑にするために
 i ! お前の希望を新たにするために!
 | ！そして、自由な思想を解放するために
 ... やってくることはない。坐っているがよい
 | i i i !.. そして何も待つな！

18 1860, 1860年10月18日
 .- 111) サンクト・ペテルブルク

Erwarte nichts !

Dahin der Jugend Glück und Kraft!
 Kalt wird die Hoffnung – greisenhaft
 Hält mich der Winter nun umfängen.
 In meine Stube tönt kein Laut
 Von Freundeslippen, lieb und traut;
 Ich bin allein mit meinem Bangen,
 Allein in Dunkelheit und Weh!

So brüte dumpf, bis ganz dich Thoren
 Enttäuscht das Leben, bis verloren,
 Zerstäubt die Träume, jäh und jäh,
 Wie vor dem Sturme der Steppenschnee,
 Bis sich dein Aug erkaltend schließt.

Erwarte nichts, denn nimmer grüht

Ein Lenz dich wieder, nimmer lacht
 Dein Hain ergrünend dir entgegen,
 Und wie es in dir öde Nacht,
 So ist kein Stern auf deinen Wegen!

Was in dir lebte, ringt sich nimmer
 Bestreit empor zum Strahl des Lichts –
 Erblichen ist der letzte Schimmer ...
 Erwarte nichts! ... Erwarte nichts!¹¹²⁾

日付から明らかのように、この詩はシェフチェンコが世を去る4ヶ月ほど前にペテルブルクの病床で書かれた。いわば辞世の詩といってもよい詩である。「鎖を断ち切れ！兄弟の契りを結べ！」¹¹³⁾、「敵の邪悪な血で自由を洗礼せよ！」¹¹⁴⁾と激しい調子で「自由への大胆な讃歌」、「辛辣な警告と復讐」、「自民族を踏みにじるロシアの偽善的なパンスラヴィズムに対する燃えるようなプロテスト」¹¹⁵⁾を歌い、ウクライナ人に自立と解放を呼びかけ、鼓舞してきたシェフチェンコの若い頃の詩を知る目には、晩年のこの詩の諦念は濃い。原詩の「春」()と「冬」()の対比に、フランツォースは、さらに原詩にはない語彙「光」(Licht)と「夜」(Nacht)の対比を加えてこの諦念をさらに深くする。「夜」の語は、翻訳の5年前の『タラス・シェフチェンコ』において、「その伝記は、まるで一編の小説のようであるが、しかしこの小説は、主人公を夜から光の世界へではなく、夜から夜へと導いてゆく」(強調 - 伊狩)と語りシェフチェンコの生が「夜」によって語られていたことを思い出す必要がある。さらにフランツォースはすでに『タラス・シェフチェンコ』において、この詩についてつぎのように述べていた。

詩「なにも期待するな」において、彼は絶望に満ち、ほとんど自分自身の弱さを恥じつつ、そしてそれと闘いながら、いまや永遠に荒涼とした夜(die öde Nacht)が自分の心に入り込み、それゆえ、永遠に自分の行く手を遮っている、と告白している。ここでも表現は俗調であ

るが、しかしその感情は民族の宿命論のうえに高々と聳えている。¹¹⁶⁾
(強調 - 伊狩)

翻訳の公表はこの解釈に5年遅れるが、こう解釈したとき、「荒涼とした夜」の一句はすでに翻訳の中に入り込んでいた。ウクライナ民族の「典型的な形姿」であるシェフチェンコの歌はそのまま「民族の苦悩と運命の歌」であり、「その感情は」、シェフチェンコ個人を越えて、「民族の宿命論のうえに高々と聳えている」というとき、フランツォースがこの詩に読んだ「荒涼とした夜」は、19世紀後半の、ロシア、ガリツィアのウクライナ人の「運命」そのものであった。「どの国にもその国にふさわしいウクライナ人がいる」としたら、シェフチェンコの、そしてウクライナ人の「荒涼とした夜」は同時に、「ドイツ文化は完全に地に墜ち」、「ドイツ文化の国家オーストリアの夢」が終焉したガリツィアそのものの状態であり、「荒涼とした夜」はまた、ヨゼフィニズムのガリツィアの再生を夢見たフランツォース自身の「失望」でもあった。それがおそらく、ただ一つの翻訳としてフランツォースがこの詩を選んだ理由であった。

「民衆の予言者」シェフチェンコの、「春を待つな、神聖な運命を！それはもう決してやってくることはないだろう」という一節は次の世紀のウクライナ人の運命を確かに言い当てることになった。フランツォースもこの翻訳の10年後にベルリンで息をひきとるが、それはこの地でウクライナ・ブームが起きる10年あまり前のことであった。

注

- 1) Roth, Joseph: Ukrainomanie. Berlins neueste Mode. In: Joseph Roth Werke I, Köln (Kiepenheuer & Witsch) 1989, S.417-419
- 2) Subtelny, Orest: Ukraine. A History. University Toronto Press, 2000 (3rd ed.) p.359
キエフ出身のウクライナ人口シア語作家ブルガーコフの『白衛軍』(中田甫・浅川彰三訳、群像社、1993年)の訳注(369頁)によれば、1917年から1920年にいたる3年間にキエフの支配者は14回替わったという。また、この引用文中の

の背に縛りつけられたという伝説は、ポーランドの回想録作者パセックによって初めて世に広められた」が、「事実無根であった」としている。

- 10) Géricault, Théodore: Page Mazeppa.
- 11) Boulanger, Louis: Le supplice de Mazeppa.
- 12) May, Andreas: Der König der Steppe.
- 13) Gottschall, Rudolf von: Mazeppa. Vgl. Doroschenko, S.279
- 14) Herder, Johann Gottfried: Journal meiner Reise im Jahr 1769. In: Johann Gottfried Herder Sämtliche Werke. Hildesheim (Olms) 1967, Bd.IV, S.402
- 15) Bodenstedt, Friedrich: Die poetische Ukraine. Eine Sammlung kleinrussischer Volkslieder. Stuttgart und Tübingen (J.G. Cotta'scher Verlag) 1845
- ボーデンシュテット (1819-1892) は、ミュンヘン大学でスラヴ学を講じたかわら、東ヨーロッパの文学の翻訳でも知られた。ウクライナ民謡の紹介者としては、フランツォースに半世紀先んじている。フランツォースも、『小ロシア人の文学』を書くに際してボーデンシュテットを参照している。
- 16) スプテルニーによれば、「ウクライナ人のおよそ80%がロシア帝国の臣民となり、残りがハプスブルク帝国に居住した。」(Ebd. p.201)
- 17) Urbanitsch, Peter: Die Deutschen. In: Wandruszka (hrsg.) : Die Habsburgermonarchie 1848-1918, Bd. III/1, Tabelle 1
- 18) Subtelny, p.203
- 19) Die österreichisch-ungarische Monarchie in Wort und Bild. Galizien. Wien (Druck und Verlag der kaiserlich-königlichen Hof- und Staatsdruckerei) 1889, S.424
- 20) Encyclopedia of Ukraine. Vol.1, Toronto/Buffalo/London (University of Toronto Press), 1985, p.942.
- なお、引用文中で触れられているフランツォースの小説『権利のための闘争』(Ein Kampf ums Recht)については、伊狩裕「権利のための闘争 カール・エーミール・フランツォース試論(2)」(同志社大学言語文化学会「言語文化」第4巻第2号2001年)参照。
- 21) Encyclopaedia Judaica, Vol.7, Jerusalem, 1971, pp.109-110.
- この記述の末尾に出てくる、「どの国にも、その国にふさわしいユダヤ人がいる」という言葉は、フランツォースの処女作『半アジアより』の序文で、「ポーランドのユダヤ人が、ユダヤ系ドイツ人、ユダヤ系フランス人の段階に達していないとしたら、非難されるべきなのは、ユダヤ人ではなく、ポーランドのキリスト教徒である。というのも、どの国にも、その国にふさわしいユダヤ人がいるからである (Denn - jedes Land hat die Juden, die es verdient.)」(Aus Halb-Asien. Culturbilder aus Galizien, der Bukowina, Südrubland und Rumänien. Leipzig (Verlag von Duncker & Humblot) 1876, S.XXf. 強調はフランツォース) という文脈に現れる言葉であるが、そこにフランツォースは、次のよ

うな註を振っている。

この言葉は私の精神的な財産である。1876年2月に代議士のメンガー博士が、私のこの言葉をウィーンの議会で行った演説のなかに取り入れ、残念なことに、多分うっかりしてであろうが、引用の形式を踏まなかった。そんなことがなかったならば、私はこのような些末なことには言及しないところである。この言葉は、議会で好評を博し、新聞や雑誌でもさかんに取り上げられ、メンガー博士がその作者であると思われるようになった。私はこのことに関してはっきりさせることに価値があるとは思わなかったが、いま、ことのついでであるから本当のことを述べておきたい。私はこの言葉を、1868年に「オーストリア・ガルテンラウベ」誌において初めて使用し、それ以来、いろんな場所で頻繁に繰り返し使用してきた。たとえば、メンガー博士の演説のほんの数ヶ月前にも「ノイエ・フライエ・プレッセ」誌上で、メンガー博士の演説とまったく同じ事柄に関して、まったく同じつながりの中で使用した…。(Ebd., S.XXI)

『ユダヤ百科事典』がわざわざ、この「言葉の出所はフランツォースである」と断ったについては、このような経緯があった。なお、引用文中で触れられているフランツォースの小説『道化師』(Der Pojaz)については、伊狩裕「『道化師』について - カール・エーミール・フランツォース試論(3)」(同志社大学言語文化学会「言語文化」第5巻第2号 2002年)参照。

22) Doroschenko, S.258

23) ドロシエンコは、『ドンからドーナウへ』の出版を1878年としている(Doroschenko, ebd.)が、これは誤りである。『ドンからドーナウへ』の初版は、その第1巻の扉には「1878年」、第2巻の扉には「1877年」と記されているが、1889年に出版された『ドンからドーナウへ』第2版の序でフランツォース自身、「1877年に初版が出版されたこの作品は・・・」(Franzos: Vom Don zur Donau. Neue Kulturbilder aus Halb-Asien. Zweite gänzlich umgearbeitete und vermehrte Auflage. Berlin 1889, 1. Bd., S.VII)と述べている。

24) Von der Redaktion. Ukrainische Rundschau, Nr.1, 4.Jahrg. Jännerheft, Wien, 1906, S.1

25) Franzos: Vom Don zur Donau. Neue Kulturbilder aus Halb-Asien. Stuttgart und Berlin (J. G. Cotta'sche Buchhandlung Nachfolger) 1912, 1. Bd., S.235

26) Ebd., S.236

27) Franzos, Karl Emil: Der Pojaz. Stuttgart und Berlin (J. G. Cotta'sche Buchhandlung Nachfolger) 1912, S.6

28) Franzos, Karl Emil: Mein Erstlingswerk: "Die Juden von Barnow." In: Ders. (eingl.): Die Geschichte des Erstlingswerks. Berlin (Concordia Deutsche Verlags-Anstalt), o.J.

- (1895), S.221
- 29) Ebd., S.222
- 30) Kłańska, Maria: Problemfeld Galizien in deutschsprachiger Prosa 1848-1914. Wien (Böhlau) 1991, S.73
- 31) Vom Don zur Donau, Bd.1, S.238. 「パテリコン」とは、聖人、教父、著名な修道士にまつわる教訓的な物語、寓話、格言の集成のこと。
- 32) Subtelny, pp.52-53
- 33) Vgl. Wendland, Anna Veronika: Die Russophilen in Galizien. Ukrainische Konservative zwischen Österreich und Russland 1848-1915. Wien (Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaft) 2001, S.53f.
- 34) Magocsi, Paul Robert: The Roots of Ukrainian Nationalism. Galicia as Ukraine's Piedmont. Toronto (University of Toronto Press) 2002, p.84
- 35) Subtelny, p.53
 スブテルニーがここで言及しているフルシェフスキの「一般的なロシア史の図式に対する最も説得力のある反論」とは、『一般的な“ロシア史”の図式と東スラヴ諸族の歴史の合理的構成をめぐる問題』であるが、この論文がロシア帝国アカデミーの「スラヴ研究シンポジウム」誌に発表されたのは1904年であった。
- 36) Vom Don zur Donau, 1.Bd., S.321
- 37) Ebd., S.236
- 38) Ebd.
- 39) Ebd., S.242f.
 すでにボーデンシュテットが、ウクライナ語を「もっとも響きの美しいスラヴ語」と表現している。「小ロシア語は、ポーランド語とロシア語の娘であるが、すべてのスラヴ語のなかでもっとも響きが美しく、とても音楽的な印象を与える。」(Bodenstedt, ebd., S.X)
- 40) 中井和夫、同上、7頁。
- 41) Vom Don zur Donau, 1.Bd., S.245
- 42) Ebd., S.260
- 43) Ebd., S.261
- 44) Ebd.
- 45) Ebd., S.262
- 46) Ebd., S.263
- 47) Ebd., S.281
- 48) Ebd., S.303
- 49) Ebd., S.304
- 50) Ebd., S.303。

アロイス・ブルーマウアー (Aloys Blumauer, 1755-1798) は、『戯曲ウエルギリ

ウスのアエネイス』で知られる風刺詩人。コトリャレフスキの『エネイダ』は、「ウクライナの口語で書かれたはじめての小説で近代ウクライナ文学の幕開けを告げるものであった。その内容は、ヴェルギリウスの『アエネイス』のパロディーである。ヴェルギリウスの『アエネイス』はローマ建国伝説で、トロイの武将、アエネイスがトロイ戦争に敗北したあと諸国を遍歴し、ついにローマの地に国を再建するという話であるが、コトリャレフスキーはこれをウクライナに移し替え、エカチェリーナに滅ぼされたザポロージェの本営のコサックが諸国を放浪し、かつてのコサック共和国を再建しようとする話である。」(中井和夫、同上、19頁)

51) Vom Don zur Donau, 1.Bd., S.304. コトリャレフスキは、『エネイダ』を発表した当時、ロシア軍の軍人であった。

52) Ebd., S.306

53) Ebd., S.313

54) Ebd., S.312

55) 組織の名称 - ii は、9世紀にスラヴ人へのキリスト教の布教を行ったキリロスとメトディウスにちなむ。「この組織の主たる目標は、一般的自由と政治的平等が必要であるという思想を広めることであった。そのメンバーたちは、ロシアとスラヴ諸国における農奴制を廃止すること、また、思想、良心、発言の自由のために闘うこと、そして宗教上の強制に抵抗することを自分たちの義務と考えていた。彼らの一般綱領には大衆教育の普及が含まれ、また彼らの政治的な計画は、選挙で首長を選ぶ連邦制による、すべてのスラヴ民族の連合国家を提案していた。」(Michael Hrushevsky: A History of Ukraine. Yale University Press 1941 / Archon Books 1970, p.486)

56) Vom Don zur Donau, 1.Bd., S.313

57) Ebd., S.313

58) Ebd., S.307

59) エムス法は以下の通り。

「(1) 印刷局長の特別許可がない限り、ウクライナ語のあらゆる書物の輸入を禁止する。(2) オリジナルと翻訳とにかかわらず、あらゆるウクライナ語の出版を禁止する。(3) ウクライナ語によるあらゆる舞台上演、音楽演奏、公開講演を禁止する。(4) 小学校においていかなる科目もウクライナ語で教えることを禁止する。(5) ウクライナの小学校・中学校の図書館からウクライナ語の本、ウクライナ人による本をすべて除去する。(6) ロシア地理学協会キエフ支部を無期限で閉鎖する。(7) ドラホマノフとチュピンスキーをウクライナから追放する。」(伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編『ポーランド・ウクライナ・バルト史』山川出版、1998年、241頁以下)

60) Vom Don zur Donau, 1.Bd., S.320

- 61) Ebd., S.296
- 62) Hrushevsky, p.468
- 63) Sydorčuk, Taïsjia: Die Ukrainer in Wien. In: Peter Jordan (hrsg.): Ukraine. Wien u.a. (Peter Lang) 2001, S.58f.
- 64) Fischel, Alfred: Das österreichische Sprachenrecht. Zweite vermehrte, bis zur Gegenwart Ergänzte Auflage, Brünn (Druck und Verlag von Friedr. Irrgang) 1910, S.XXXIII
- 65) Wenedikter, Richard : Die Karpatenländer. In: Karl Gottfried Hugelmann(hrsg.): Das Nationalitätenrecht des alten Östereich. Wien-Leipzig (Wilhelm Braumüller) 1934,S.688
- 66) Franzos: Aus Halb-Asien (Einleitung). In: Aus Halb-Asien. Culturbilder aus Galizien, der Bukowina, Südrußland und Rumänien. Leipzig (Verlag von Duncker & Humblot) 1876, S.XII
- 67) Vom Don zur Donau, 1.Bd., S.296f.
- 68) Ebd., S.296
- 69) Ebd., S.297
- 70) Ebd., S.306
- 71) 「醸造・蒸留酒製造販売法」(Propinationsgesetz)、および「製粉所法」(Mühlgesetz)については、野村真理「恩讐の彼方 東ガリツィアのポーランド人・ユダヤ人・ウクライナ人」(大津留厚他 『民族』 ミネルヴァ書房、2003年)、45頁以下参照。
- 72) Vgl. Wenedikter, S.689
- 73) Vgl. Subtelny, pp.244-245
- 74) Vom Don zur Donau, 1.Bd., S.314。
- バッハ (Alexander Bach) は、シュタディオンの後任として、1852年から1859年まで内務大臣を務め、三月革命後の新絶対主義の時代を作り出した。超保守派として知られている。
- 75) 「ガリツィア決議」(Galizische Resolution) とは、1868年9月24日のガリツィア領邦議会における以下の決定をいう。

領邦議会は領邦規約19条に基づき以下を宣言する。1867年12月21日の国家基本法によって作り出された君主国の機構は、我々の領邦の歴史的・政治的過去、その特殊な民族性、文明化の程度と領土の広さの程度を考慮するならば当然認められるべき立法上・行政上の自主性を我々の領邦に対して認めてはならず、それゆえ、民族的発展の願望にも、そのための条件にも、そして現実的な領邦の要求にも応えておらず、この状態がこれ以上続く一般的な不満が募り、我々の地方の繁栄と君主国全体の幸福を損なうような作用を及ぼさざるを得ない。

領邦議会は領邦規約19条に基づき以下の提案を行う。クラカウ大公国を含むガリツィア・ロドメリア王国に対して、その必要と特殊な領邦の事情に応じて民族的自治（nationale Selbstverwaltung）を認めること。

特に：

- 1．領邦議会在、専決的に帝国上院選挙の方式を決定しなくてはならない。
- 2．ガリツィアの領邦議会代表は、上院に代表を派遣している君主国の他の地域と王国とに共通の事案に関してのみ、帝国上院の審議に参加する。
- 3．以下の事項は、それらがクラカウ大公国を含むガリツィア・ロドメリア王国に関する限り、国家基本法によって規定された帝国上院の管轄範囲から切り離し、同法の12条がいう意味で領邦議会の権能に移行する：
 - a) 商業会議所および商業組織の開設。b) 信託銀行、保険会社、銀行と貯蓄金庫に関する立法。ただし手形銀行は除く。c) 居住権に関する立法。d) 国民学校、ギムナージウムに関する教育制度の原則の決定、および大学に関する立法。e) 刑法、警察法および民法に関する立法、そして鉱山法に関する立法。f) 裁判所と官庁の組織の基礎に関わる立法。g) 国民の一般権に関する国家基本法実施のために裁判権・執行権に関し公布され、そこで抛り所とされる法律。h) 君主国の他の諸領邦に対する我々の領邦の義務および諸関係に関する事項に関わる立法。i) 国民の一般権に関する1867年12月21日の国家基本法第4条から帰結する制限のない市町村立法。
- 4．ガリツィアの行政機関、裁判組織、文化と教育、公安、そして領邦文化の支出補填に関しては、実際の必要に応じた額が領邦議会に与えられている国家予算からは控除され、使用細目に関しては帝国上院の権限外に置かれる。
- 5．クラカウ大公国を含むガリツィア・ロドメリア王国に属する財産、いわゆる国庫財産は領邦の財産としてこの王国の領邦基金に組み入れられる。
- 6．王国の塩業はこの王国の領邦議会の承認なくして販売されることも、交換されることもならず、あるいは抵当に入れられてもならない。
- 7．クラカウ大公国を含むガリツィア・ロドメリア王国は独自の最高裁判所と上告裁判所を持つ。
- 8．王国は領邦内行政、司法、教育、公安、領邦文化に関して、領邦議会に対して責任を負う領邦政府（Landesverwaltung）、及び領邦大臣を王国の委員会の中に持つ。

Bernatzik, Edmund: Die österreichischen Verfassungsgesetze. Wien (Manzsche k.u.k. Hof-Verlags- und Universitäts-Buchhandlung), 1911, S.1132f.

76) Wenedikter, S.692f.

77) Franzos: Aus Halb-Asien (Einleitung). In: Aus Halb-Asien. Culturbilder aus Galizien, der Bukowina, Südrußland und Rumänien. Leipzig (Verlag von Duncker & Humblot)

ウクライナ正教の司祭たちはポーランド人たちによって追放され、正教の教会は閉鎖され、教会の鍵は高い利子でユダヤ人たちに貸し与えられた。ウクライナ人農民たちは、自分たちの教会で礼拝したいときには、貸し主のユダヤ人に高い賃料を払って、何時間か教会の鍵を借りなくてはならなかった。貧しい者たちは大きな祭日のときにしか、鍵を借り受けることができなかったが、それでも満足しなくてはならなかった。それは彼らにとっては堪え難いことであったので、同胞、すなわちザポロージェのコザックに助けを求めた。凶暴で恐ろしい人間であったゴンタ（ホンタ）という名のウクライナ人に率いられ、コザックたちがやってきて、ポーランド人とウクライナ人を、とくにフマン（ウーマニ）占領にさいして、大量に殺戮した。

- Vom Don zur Donau, 2. Bd., S.70f.

ユダヤ人による教会の賃貸はその後19世紀にも行われているとして、フランツォースは、つぎのようなウクライナ民謡を紹介している。

今日は聖なる復活祭

今日、私たちの苦役は終わる

やっとユダヤ人がやってくる

帽子に鍵をぶらさげて

風のように駆けつけて、

教会の扉を開ける

私たちは支払う - 私たちの苦しみで！

なぜなら、リヤヒェ（ =ウクライナ語でポーランド人に対する蔑称）がそう命じるからだ

悪魔よ、すぐにユダヤ人とポーランド人をみんな連れて行け！

- Ebd.

94) Vom Don zur Donau, 2.Bd., S.43

95) Ebd.

96) Ebd.

97) Ebd., S.47

98) Ebd.

99) Ebd.

100) Ebd., S.49

101) Ebd.

102) Ebd., S.49f.

103) シェフチェンコは、1845年31歳の時、ペテルブルクからウクライナへ戻り、そこで、故郷ウクライナへの愛と、自由と独立のための戦いを鼓舞する「遺

言) (i) と題する詩を書いている。彼の詩のなかでもっとも有名で、もっとも愛誦されている詩である。そこでシェフチェンコは、「私が死んだら、葬ってくれ、わが愛するウクライナの、広いステップのただ中の墓に。広い野原、ドニプロ川、その岸壁が見えるように。そしてその流れが聞こえるように」 (: , i , i () 2002, .323-324) と歌っている。

104) Vom Don zur Donau, 2.Bd., S.56

105) Ebd.

106) Ebd., S.57

107) Ebd.

108) Ebd., S.51

109) Ebd.

110) Ebd., S.73

111) : , .606

112) Franzos (hrsg.): Deutsche Dichtung, Bd.16, S.263 (1894)

113) : l , i , i i
i i i e ee ie. , .304

114) : i . , .323

115) Vom Don zur Donau, 2.Bd., S.50

116) Ebd., S.60

Karl Emil Franzos und die Ukraine

Yutaka IKARI

Vor dem ersten Weltkrieg waren die Ukrainer dem Westen fast völlig unbekannt. Wahrgenommen wurden sie lediglich von den in Galizien wohnenden Deutschen. Die Ukrainer wohnten damals zum Teil in Österreich, wo sie als Ruthenen bezeichnet unter dem Joch von Polen standen, und zum Teil in Russland, wo sie Kleinrusse genannt und unterdrückt wurden.

Karl Emil Franzos (1848-1904), geboren in einer assimilierten jüdischen Familie in Galizien, ist heute nur als ein Schriftsteller vom jüdischen Ghetto in Galizien bekannt. Er war jedoch auch einer der wenigen Deutschen, der sich damals für die ukrainische Kultur interessierte, und schätzte insbesondere ihre Volkslieder und Literatur hoch. Dies lag u.a. daran, dass die ukrainische Sprache seine erste Sprache war und ihm die ukrainische Kultur von Kind auf sehr vertraut war.

Eine Untersuchung der “Ukraine von Franzos” ist nicht nur für seine ganzheitliche Würdigung notwendig, sie bietet auch einen Zugang zum Verständnis der Spezifität Galiziens im 19. Jahrhundert.

Franzos behandelte die ukrainische Literatur in “Die Literatur der Kleinrussen” und “Taras Szewczenko”. Beide sind in der Sammlung “Vom Don zur Donau” (1889) enthalten. Im ersten Werk behandelte Franzos vor dem geschichtlichen Hintergrund der Ukrainer und ihres unglücklichen Schicksals die ukrainische Literatur vom 11. Jahrhundert bis in die 1880er Jahre. Im zweiten konzentrierte sich Franzos auf eine einzige Person, den Dichter Taras Szewczenko (1814-1861, auf Deutsch: Schewtschenko), und beschrieb, wie sich in ihm das ganze nationale Schicksal der Ukraine spiegelt. Die beiden Werke ergänzen sich also gegenseitig.

5 Jahre nach dem “Taras Szewczenko” übersetzte Franzos ein Gedichte von Szewczenko, in dem dieser kurz vor seinem Tod seine Enttäuschung und Hoffnungslosigkeit ausdrückt. Szewczenko hatte in jüngerem Jahren auch zahlreiche provokative und hoffnungsvollere Gedichte verfasst. Dass Franzos gerade dieses Gedicht auswählte, übersetzte und mit dem Titel “Erwarte nichts!” versah, zeigt, wie sehr Franzos seine eigenen Gefühle darin gespiegelt sah.

Karl Emil Franzos and Ukraine

Yutaka IKARI

Keywords: Franzos, Ukraine, Taras Shevchenko, Galizien